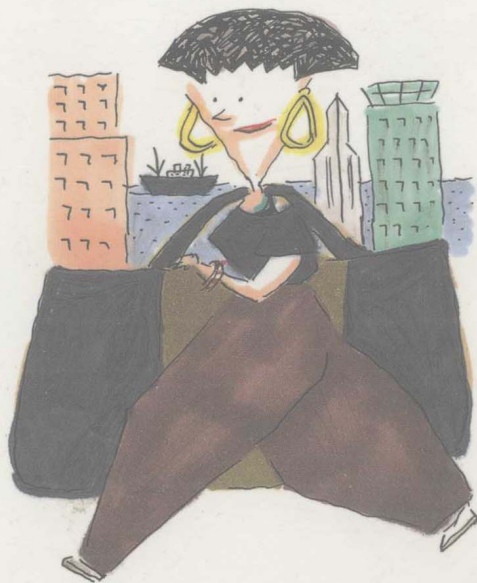


スタイリスト

坂本幸恵

モデル兼ヘアメイクとして活躍していた著者が、ある日出会ったスタイリストの仕事ぶりに魅せられ「これだ！ この仕事だ！」と10年後の仕事を決める。苦勞しながらも、自分の感性を唯一のたよりにクリエイティブな世界へ飛び込み、夢を実現する。



実業之日本社

坂本幸恵（さかもと ゆきえ）
北海道旭川生まれ。モデルからヘアメ
イクの世界に入るが、ある日出会ったス
タイリストの仕事ぶりに魅せられ、10年
後の仕事をスタイリストと決める。それ
以後、日々の仕事を通してそのノウハウ
を学び、目標どおり自分の感性を唯一の
武器に夢を実現。CFはもとよりイベン
トの衣装作りから写真集、ディスプレイ、
物撮り、ファッションショーなどさまざ
まなジャンルで活躍中。

仕事——発見シリーズ ㊶

スタイリスト

著者／坂本幸恵

*

初版第1刷／1992年10月20日

発行者／増田義和

発行所／実業之日本社

東京都中央区銀座1-3-9／振替東京 1-326 郵便番号104
電話・編集部 03(3535)2688 販売部 (3535)4441

*

印刷所 廣濟堂

製本所 共文堂

*

© Yukie Sakamoto Printed in Japan 1992

落丁本、乱丁本は小社でお取りかえいたします

NDC 370

スタイリスト

坂本幸恵



実業之日本社

装丁／安彦勝博
カバー絵／古川タク

スタイルリスト*目次

I グラナダへの夢を抱いて……………7

父の入院 8

母の優^{やさ}しさと強^{つよ}いうしろ姿 13

三つのできごと 15

II スタイリストへの挑戦……………23

モデルからヘアメイクへ 24

あるスタイリストとの出会い 33

スタイリストを目指して 36

初めての仕事 40

III クリエイトする喜びと厳しき……………61

スタイリストは物集めだけじゃない 62

イメージを追い求めて 69

新しいジャンルへ 80

事務所を持って一本立ち 92

さまざまな人との出会いと別れ 99

何があるうと仕事は仕事だ！ 104

スタイリストの感性 108

みんな私が悪いんです 123

大ボケ編／大ドジ編／バカ力編

IV

ハプニング続出の海外ロケ…………… 135

三十九度八分の熱 136

秋刀魚さんまの土左衛門どざえもん 140

白のブルゾン 144

交通事故 150

最後の場所 155

乗客名簿に名前がない 164

V

新しい生き方を求めて……………177

失明寸前の大怪我^{けが} 178

自分を知るということ 188

体力の限界と自分の将来 194

夢に向かって 201

スタイリストを目指すあなたへ 204

あとがき 208

I
グラナダへの夢を抱いて

父の入院

小学校三年生の終わり、春休みに入ってまもなくのことであった。色白で少し痩せ気味の母の目が、やたらせわしなく動き、私たちに何か必死に叫んでいた。

「お父さんが怪我したらしいの。病院に行くから、ユッコちゃん早く支度してちょうだい」

ひどく声が甲高かったのを覚えている。何がなんだかよく分からなかったが、急がなければいけないんだ、そう思い、あわてて支度を始めた。

宮下医院と書かれた病院の戸を、母が押し開けた。母のあとに続き病院に入った。ベッドに横たわる父を見た。いや、父ではなかった。バケモノだ、と私は一瞬そう思った。恐ろしかった。

からだ中に、白く太い包帯がグルグル巻き付けられ、包帯の間から赤紫色に腫れ上がった

た顔がのぞいていた。顔面が歪み、引きつれていた。目玉がこぼれ落ちそうなくらい目を見開いて、母の背中越しに父をのぞき見ながら、ただ恐ろしさをこらえて、その場につ立っていた。

父は会社の建物の三階の窓から転落したらしい。真夜中のできごとであった。父は左半身を地面に叩きつけ、出血多量、意識不明の重体で、病院に担ぎ込まれた。

「この一週間、命の保証はできませんので……」

と、医者母に告げた。

しかし、周りの人々の祈るような心がつうじたのか、父は回復の兆しをみせ始めた。父の生命力は異常なほど強かった。なんとか一命を取り止めたが、その後、何年にもわたる入院と、何度かの大手術を繰り返さなければならなかった。

四年生の新学期が始まっていたが、私と弟は埼玉県の所沢にある母の実家に預けられた。その当時、私たち家族は品川区の荏原中延から、西武池袋線の沿線にある東久留米に引っ越したあとであった。

父が入院したのは会社の近くであり、以前私たちが住んでいた家の近くであった。母は

父の容態がよくなるまで病院に泊まり込むことになり、兄は病院で母の手伝いをしながら学校へ行ける日を待ちわび、私たちは母が迎えに来てくれる日を待ちわびていた。

今思うと、私は小さなころから可愛げのない、分け知り顔をした、子供らしくない子供だったようである。

母の実家で過ごしていたある日のこと、祖母がものすごい勢いで私たちを叱りつけた。

「なんでこんなところにビー玉入れとくダァ、ちゃんと片付けろと言ったダニ！」

私たちは片付けたのである。足の不自由な祖父が踏んづけて転ぶといけないから、きちんと片付けるように、と言う祖母の言葉どおりにしたのだ。片付ける場所にいろいろ悩んだ末、私たちは玄関の横に取り付けられた、牛乳箱という便利な場所を選んだのである。外で遊んでいても、すぐに片付けられ、家の中からでも取り出しやすく、雨にも濡れず、大ききもちょうどよかった。

「そんな悪さべエする奴は、家に帰えれ！」

「お婆ちゃんが言うから片付けたのに……」

と、私はつぶやいた。

「口答えすんじゃないわねエ！ あんなところに入れたら、牛乳屋さんが困るべエ」
私はひどく腹が立った。

「人の言うことが聞けねえ奴は、家に帰えれ！」

「べつにお婆ちゃんに面倒みてもらわなくても困らないもん。ご飯だって炊けるし、おかずだって作れるもん。お母さんがいなくなつて自分で全部できるよ。平気だよ」

と言ひ返した。

私はちゃんと片付けたのに、怒るんだつたら自分で場所を決めればいいじゃん。そしてら、そこへちゃんと片付けるのに。片付けろつて言つたつて、どこに片付けたらいいのか分からないよ……と、頭の中でどなり返していた。

祖母が裏庭へ出ていった。私は自分たちの荷物を押し入れから引つ張り出して、風呂敷ふろしきに包んだ。土間の上がり口にある囲炉裏いろりの脇のゴサの下に、祖母がいつも小銭を突っ込んでおくのを知っていた私は、それをいくらか失敬して、弟の手を引きバス停へと向かった。

私たちが家を出ていったことに祖母が気が付くまでには、かなりの時間が経たっていたのだが、しかし、田舎のバスはなかなかやっつては来なかつた。

バスを待っている間に、私は気が付いた。

「のっちゃん、お姉ちゃん家の鍵持っていないよ。帰っても家に入れないよ」

「お母さんが持ってたの？」

「うん……」

「じゃあ、お母さんのところへ行こうよ」

弟が嬉しそうに私の顔を見た。

「だめだよ。お母さんは、迎えに行くまでいい子にして待ってなさいって言ったもん」

「じゃあ、どうすんの？ 家に帰らないの？ お姉ちゃん、家に帰るって言ったのに」

弟は泣き出した。私も泣き出しそうになるのを必死でこらえていた。

バスが一台通り過ぎて行った。私はただ、うなだれてその場に立っていた。祖母が迎えにやって来て、

「家に帰えれ！」の一言で終わった。

何があっても泣きもせず、弟の面倒をみながら待ちわびた母が、二カ月ぶりに私たちを迎えに来た。

母の優^{やさ}しさと強^やいしる姿

母の姿を見るなり、祖母がびっくりするほどの大声を張り上げて、私は泣きわめいた。私につられ、弟も母にしがみついて泣いていた。さすがの母も驚いたほどであった。

父が入院して、大黒柱を失ってしまった我が家の生活は、瘦^やせた母の腕一本にかかっていった。食べ盛りの子供三人と入院を繰り返す父とを抱え、いくら必死に母が働き続けても、どんどん生活は苦しくなり、しまいにはお米を買うお金にも困るようになっていった。

母は洋裁の腕一本で私たち家族を支えていた。毎晩、夜中まで仕事をし続けるミシンの音が聞こえていた。

冬のひどく寒い夜など、腰から足へと毛布を巻き付け、両手をこすり合わせながら、何時間も仕事をし続けていた。朝、子供たちが起きてきたとき、寒い思いをしないようにと

石油を切りつめ、自分は我慢がまんしても子供たちだけには、という母の優しさと、たくましいうしろ姿を何度も私は見た。

私がどれほど苦しく、寝る時間もないほどのハードなスケジュールに追いまくられても、ギブアップせずに頑張り続けられるのは、そんな母の姿を見ながら育ったからかもしれない。

母はそんな忙しさの中でも、ほんの少しの暇ひまを見つけては、注文服の余りのとび切り上等な生地きじで、私たちのために何着もの服を作ってくれたのである。

毎朝母は、腰まである長く伸ばした私の髪の毛を、頭のとっぺんに結び上げてお団子を作り、リボンやボンボリの髪飾りを付けてくれた。そして、私は母が作ってくれた上等なワンピースを着て学校へ通った。その当時そんな洒落しやれた格好かっこうをしている子供など、周りには誰もいなかった。そして、それは私の唯一の優越感であった。

私は少しでも母を助けようと、食事の支度から買い物、洗濯、掃除と、子供ながら自分にできることはなんでもやった。

学校から帰ると、仕事をしている母のかたわらで、私は自分の人形の服を作った。見よ

う見かねで作ったり、ときには母に縫い方を習ったりしていたが、それは私にとって、とても楽しくことに思えた。

小学校六年生のころには、母の手伝いが多少できるようになっていた。スカートの裾すそをまつつたり、尾錠びじょう金かね（締め金具）やスナップやボタンを付けたりしていた。スカートやズボンの尾錠付けなどは、いつのまにか母より上手にできるようになり（これだけは、いまだに私の方が上手なのだが）、母が縫っている横で、早く私の出番が来ないものかと、首を長くして得意げに待ったものである。

三つのできごと

そんな子供時代を過ごしていた私は、小学校五年生から中学校二年生の間に、三十年近く経った今も、鮮明せんめいに記憶している、三つのできごとに出くわした。それは成長してから、常に私の生き方や人生に大きな影響を与え続けた。